

塩釜市の桂島の棧橋から南の海に向かって五分ほど歩くと、「たんぽぽ館」の看板を掲げた築約三十年の木造平屋の建物がある。目前の海水浴場

〇〇二〇〇

島々を渡る風

塩釜・浦戸諸島



から届く波の音が、静かに建物を包む。入り口には、ハマナスがたわわにだいたい色の実を付けていた。

七年ほど空き家のままになっていた民宿を借りて昨年四月、施設を開いたのは、多賀城市笠神五丁目の主婦中村恵子さん(六五)。「たんぽぽ倶楽部(くらぶ)」というグループをつくり、自由なセカンドハウスとして提供している。

会員は塩釜、多賀城市のほか、東京など約四十人。五部屋を有する建物の賃貸や維持などは、ほとんど中村さんが私費を投じて支える。「ここは最高の場所。島で過ごす

幸せを独り占めするのはもったいない」と話す。

中村さんは三十七年前、家族五人で仙台市に

乗用車で移動中、交通事故に遭い、娘と瀕死(ひんし)の重傷を負った。中村さん自身も意識不明の状態が三日間続き、生死の境をさまよった。事故後のリハビリ、障害が残った娘の子育て。六十歳を過ぎたころ、あらためて多くの人々の支えで生きてきたこれまでに振り返った。困難を乗り越えた体験を生かして、社会に何か恩返しができないかと思った。

「たんぽぽ館」は産声を上げたばかり。ゆっくりと会員の輪を広げ、障害者や高齢者の福祉、生涯学習などに取り組んでみたいと将来像を描く。中村さんは「島の暮らしに貢献できるような活動を探しながら、生きがいづくりの橋渡しができたらいいですね」と語る。

Photo: Y. Yamamoto

たんぽぽ館

人の心 温かく包む

で活動する自主保育サークルのメンバーが、「たんぽぽ館」を訪れた。母親と入学前の幼児ら約二十人が一泊二日を過ご



「たんぽぽ館」を出て、海に向かう中村さん(中央)と子どもたち

て渡る島は、まるで別世界のような感じがしま心を包み込むような花のす」とにっこり。中村さん温かさ。綿毛のように遠くまで種が飛んで、たくさんの人を結んでほしい」と、その思いを建物

「たんぽぽ館」の代表を務める塩釜市の主婦阿部智明さん(四〇)は「船に揺られる塩釜市の主婦阿部智明さん(四〇)は「船に揺られ

看板に掲げた「たんぽぽ」の名に込めた。坂道を上る姿が一層、生き生きと

Photo: Y. Yamamoto

足具合が思わしくなして見えた。